山登如

2021年度
付中通信第１号

多様性社会とSDGs

2021.4.11　　高水高等学校付属中学校長　宮本　剛

「たかちゅう」校長として私は８年目を迎えました。１年前の春、７年目を迎えた私は、迷いとの決別を宣言しました。建学の精神や校訓に言及した後、こんなふうに。

令和3年度入学式　学年集会

…したがって、後生の一人である私は、現代の状況をよく見極め、先人たちが残してくれた理念を、いかに今、目の前の生徒たちに向かって実現していくか、その方法や手段を考え、実践していかなければならないというわけです。私が揺れ動いてきたのは、以上のような事情からでした。１年１年が、理念と実践の辻褄合わせの連続でした。この６年間、私の教育への思いは、ここ「たかちゅう」を舞台に変化変容し続けました。それはやはり、グローバル化やＡＩ化、そして少子高齢化によって見る間に変貌を遂げる現実世界への対応に明け暮れていたからだと思います。だが、もうこの辺で変化も変容も終わらせたいと思います…。

「７年目！」の節目に私は、「向かうべき教育の目標とそこに至るまでの方法」を付中の学校案内に記しました。そこでキーワードになっているのは、「多様性社会」です。人類の歴史は、人と人、部族と部族、国と国というような対立軸を背景とした権力の興亡史と見るなら、そこで繰り広げられてきたのは、民族や宗教などの多様な個別性を、差別や偏見によって否定し、正義の名のもとに武力と経済力で支配したりされたりというものでした。しかし、今や多くの国と地域で私たちは、人の多様性について学び、謂（いわ）れなき差別と偏見の正体について、客観的で冷静な判断ができるようになっています。

ところが、こころと頭（あたま）とはなかなか一致しないものです。この度のコロナ禍で、そういう現実に改めて直面しました。学んだはずの差別と偏見の正体をあっさり忘れてしまっているという恐ろしい現実です。コロナ感染者に対し冷静さを失い、

興奮と動揺の中で差別や偏見に満ちた言動や態度を示す人たちが少なからずいます。利己的な人の性向に胸がふさがります。また、日本はいまだに性差別による社会構造から抜け切れていない、先進国の中でも特に改革の進まない国だとは言われ続けています。少数民族を迫害したり、信仰や言語の自由と独立を認めなかったりするような国と比較すれば、まだましかもしれませんが、でも私たちの根っこにあるものは同じだと言ったら、それは違うと誇らしく言うことができるでしょうか？ さらに、ＬＧＢＴＱや外国人労働者の件も避けては通れない課題でしょう。

スプリングセミナー（中１）退所式

　世界中に、多様性を否定することによって一時的に精神的または経済的に利益を得る人々がいます。しかし、長い目で見たら、つまりＳＤＧｓ的な観点で人類の行く末に皆で責任を持とうという、それが唯一の個々の幸せを実現する方法だとしたら、私たちは健全なそして一人ひとりの個性が尊重され、大切に扱われる多様性社会の実現に与（くみ）していくべきです。